ソードアート・オンライン～神出鬼没の二人組～

final

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソードアート・オンライン～神出鬼没の二人組～

【Ｎコード】
Ｎ２５６７Ｗ

【作者名】
ｆｉｎａｌ

【あらすじ】
デスゲームと化したＳＡＯの中で生きていく二人の男女。キリトやアスナ等『攻略組』がゲームクリアを目指していく中、自由気ままにこの仮想空間内を生きているとある二人の幼馴染の物語を描いた物語である。

・この物語は電撃文庫より発売中のライトノベル、「ソードアート・オンラインの二時創作小説です　・オリジナル主人公メインの物語ですが、基本ストーリーは原作に乗っ取ります。

独自解釈やオリジナル要素が入ってくるのでそう言うのが苦手な方は回れ右を推奨いたします。

Prologue

西暦２０２２年１１月６日。ゲーム界を揺るがすとてつもない製品が世の中にリリースされた。

『ソードアート・オンライン』

通称ＳＡＯと略されるそのゲームは初回ロットの１万本を僅か１日も経たないうちに売り切った。

このゲームの魅力は何と言っても直接神経結合環境システム、『ナーヴギア』を導入した初の多人数同時参加型ＲＰＧ、ＶＲＭＭＯＲＰＧということであろう。

ゲームの中に飛び込む。そのゲームの中で本当に生活をしているかのような気分になれるこのゲームは買った人間を一人残らず魅了した。

そして、運良くもゲームを変えた人間が、その初めての感覚に歓喜し、酔いしれている時事件が起こった。

『ログアウトボタンの消失』

これは全神経を仮想空間に投影させるこのゲームにとって致命的ともいえるミスだった。全ての感覚を仮想空間に取り入れるため、現実世界の体は一切動かすことが出来ない。そのため内側からログアウトするほかに、一人で外に出ることは実質不可能なのだ。

そんな現象を見つけプレイヤーたちが混乱に陥る中、運営側から発表があるとのことで、１万人のプレイヤーがこのゲームが始まる

場所、『はじまりの街』の広場に集まっていた。

――――なんだ、やっぱりバグか……。

全プレイヤーがそう安堵の息を吐く中、このゲームの制作者、茅場晶彦（やばあきひこ）から発せられた言葉はその期待を１８０。裏切るものだった。

『ゲーム内での死はそのまま現実世界での死に直結する』

彼がどういった意図でこの宣言をしたのかは分からない。
しかし、広場に集まった一万人のプレイヤーがこの言葉を聞いた瞬間、全員が一度絶望したことは確かだろう。

泣き叫ぶ者、怒り狂う者、今だ状況が理解出来ずその場に立ち尽くす者。

それぞれがそれぞれの反応を見せる中、この世界が期待していたゲームはその姿を一変させ、プレイヤーが本当の『命』をかけて戦う、正に命懸けの『デスゲーム』になった。

この物語は、このデスゲームの中で生きていくと決意をした者の生き様を描いたものである。

第一話：デスゲーム

――――カチャッ。

俺が片手剣を目の前のモンスターに向けるように構えると、金属特有の音が静かに辺りに響いた。

目の前の敵は正に異形。

人並みにでかいトカゲが二本の足で立ち、右手に剣、左手に丸い盾を構えている姿は現実世界の生物学者が見たら卒倒すること間違いなしだな、と場違いなことを思う。

「ギャオオォォォォ！！」

そのトカゲが奇声を上げながら剣を振り上げ、こちらに向かって突進してくる。俺はそれを限界まで引き付け、その刃が振り下ろされるのと同時に体を左へと傾けその攻撃を回避。

更にカウンター気味に奴の首目掛けて右手の剣を振り上げた。

肉が引き裂かれる独特の音と共に、奴の首が地面に転がり落ちる。クリティカル判定がなされ、ＨＰバーが急速に現象していく。首が落ちているのに胴体だけバタバタしている光景はあまり見ていて気分が良いとはいえないが、このトカゲの右上に存在しているＨＰバーが１ドットもなくなると、その体を形成していたポリゴンを周囲に撒き散らしながら消えていった。

「ふぅ……」

トカゲとの殺し合いが終わり、まだ綺麗に輝く自慢の愛刀を腰の鞘に納めると、俺は草が地平線まで広がる草原に腰を下ろした。

「やっぱまだこえぇわ……」

あの史上最悪の宣言がなされてから二年。デスゲームと化したこの世界で効率よく生きていくためには、いつまでも安全な町にいるわけにはいかなく、多少危険を冒してでも外に出てモンスターを狩るのが一番だった。

第７０層ともなると、流石に敵も強く、一戦一戦が本当に命懸けであり、２年戦ってきてもその感覚になれることはなかった。

「いやー相変わらず綺麗な戦い方だねーハヤト」

草原に座りながら、現実世界では滅多に見られないその綺麗な風景を眺めていると、不意に後ろから声が掛けられた。

「ナギサか？そんなんでもないよ。ほら、実際にＨＰバーが黄色ま

でいっちゃってるしさ」

そういって俺は自分の右上を指差した。それをみてナギサは「あら、ほんとだ」と言って俺の隣に腰を下ろした。

さっきから話しているこいつの名前はナギサ。というのはこのゲーム内での名前で、実際の名前は白鳥渚（しらとりなぎさ）。仮想空間の中にいるはずなのに、なんで俺がそんなこと知っているのかっていうと答えは簡単、現実世界でのクラスメイトだからだ。

同じ高校の同じクラスであるこいつをあの宣言がされた広場で見つけた時は、ほっとして何故だかお互いに笑ってしまった。

無論、その周囲の何人かにはおかしくなったと思われ、哀れみの目で見られたが。

「そういえばあのスキルは使ってないの？」

俺の顔を覗き込むように尋ねて来る。こいつは意識してないみたいだけど、やけに顔が近い。思わず顔を離してしまった。

ちなみにこのＳＡＯというゲームは極端に女性人口が少ない。いや、いることにはいるのだが、現実世界の容姿が反映されるこのゲームにとってナギサ程の――こう言っては何だが――美人はそうはいなかった。

高校でも人気があったナギサはもちろんこっちの世界でも人気が

あり、数多くのパーティーに誘われていた。

そんな奴の顔が近くにあるということで、少し動揺しながらも問いの答えを返した。

「あぁ。結局まだこのスキルが何なのかすら分かってないからな。もっと下の３０階層くらいならまだしもここであれを使うのは流石に怖い」

「そっかー。そうだね。変なことが起きてそのままさよならーっていう場合もあるし」

さらっと酷いことを言う奴である。

さっきから話題に上がっているスキルというのは俺の『ユニークスキル』である。このゲーム内の多くのスキルの中でたった一人しか持たない固有能力みたいなものだ。

まぁ俺のはゲームのバグなんじゃないかと思うんだが。

なぜなら『文字化け』しているのだ。

普通はスキルウィンドウを除けば例えそれがユニークスキルだとしてもちゃんと設定された名前が存在しているはずなのだが俺のそれには名前が存在していなかった。

いや、あるにはあるはずなのだが文字がおかしくなっていて読むことが出来ない。

それゆえにそこから派生するスキルも習得することが出来ないため、通常行われるシステムからのサポートの恩恵に預かれないため、ひどく制御が難しかった。

そのためこのスキルを使ったのは５０階層以前で、それ以降はあんまり使ってない。それこそこいつの言うようにあっさり死ぬこともある。そんなことは御免だ。

「とりあえず一回町に戻ろ？ここにいちゃ、いつモンスターが出てくるか分からないし」

「そうだな。戻って飯でも食べるか」

ナギサの言葉に頷きながら立ち上がると俺達はその場を後にした。

人物紹介（前書き）

人物紹介です。
グダグダと長い文章で読みにくいかもしれません；；
読みにくかった場合はご指摘ください。

人物紹介

名前：神白隼人（かみしろ はやと）

ＰＣ名：ハヤト

レベル：８２

スキル：片手直剣スキル、曲剣スキル、索敵スキルは完全習得。適当な気分により、投擲スキルも習得。熟練度はそれほど高くはない。バトルヒーリングは一度ＨＰバーが見えないくらいの瀕死状態に陥った時に獲得した。そのほかには趣味の釣り、軽い料理などを習得している。

エクストラスキル：比較的簡単に手に入る『カタナ』をなぜか手に入れてしまい、習得した。それ以外はとくになし。

ユニークスキル：理解不能の文字化けというバグが起きているスキル。本当に訳の分からない文字の羅列で表記されておるため、その下の派生スキルも一切習得することが出来ず、このスキルを扱うときは全て自分の管理の下に扱われる。

　このスキルが発動すると、アイテムウィンドウから刀剣類の武器を４つ選択し、自分の周りの空中に待機させることが出来る。ハヤト自身これを最初に使った時は驚いたもので、「これ最早、魔法の領域なんじゃね？」とナギサに対して苦言を漏らしている。

　待機させた刀剣類は任意で攻撃させることが可能。攻撃力はハヤトの筋力パラメータに比例し、スピードはそのまま敏捷パラメータに依存する。手に持つ剣もあわせて５つの剣による同時攻撃が可能なことからハヤト曰く「ＳＡＯ中で最強スキルじゃないか」と言わ

れている。
　しかしハヤト自身、このスキルにはあまり信頼を置いておらず、あくまでバグの下に生まれた変なスキルという認識である。
　このスキルは扱うプレイヤーに絶対的な空間認識能力を要求し、それを持っていないプレイヤーがこのスキルを万が一使用した場合、剣を空中に待機させることが出来ずに、地面に落下してしまう。

人物紹介：黒髪に少し茶髪が混じったような髪色で、ストレート。髪自体はそれほど長くなく、前髪は眉毛にかかる程度の所で止めてある。髪型は基本は何もせずそのままだが、たまに寝ぐせなどで異常な程逆立つ時がある。
　現実世界では高校二年生の１７歳。両親と姉、兄の５人暮らしをしている。気まぐれで応募したベータテストに運よく当たってしまい、それからＳＡＯの世界にのめりこんでいった。部活動のサッカーで鍛えた脚力と動体視力に状況判断、そして持ち前の運動神経を生かして、常識にはとらわれない動きをＳＡＯ内では繰り広げていく。
　ユニークスキルはベータテスト時にはなかったが、製品版をもらい、ログインした時には最初からあった。訳も分からずそのスキルを選択し、戦闘をしてみた所、やたら強い疲労感に襲われたためそれ以降はあまり使用していなかった。
　だが、デスゲームの宣言がなされナギサと合流してからは、たまに気まぐれで使うような時があり、段々とこのスキルにも慣れてきている。しかし所詮はチキンなので６０層以降の階では未だに使用回数０。

　ナギサとは高校での同級生であり近所。所謂、幼馴染であり兄弟のように育ってきた。それ故、ＳＡＯ内でナギサを見つけた時は本当に歓喜し、喜びを分かち合った。

身長は１７３ｃｍ。中学3年の時点で１７０あった身長が高校に入っても伸びると思われていたのに、まったく伸びず一抹の不安を抱いている。本人曰く「男として１８０ｃｍは欲しかった」とのこと。※あくまで偏見です。

性格は基本のんき。たまに変な妄想やら想像やらが暴走して人格破たんすることがあるが、数分後には自制かナギサの突っ込みが入るので問題ない。

戦闘になると、普段からは考えられないような動きを見せモンスターを翻弄する。だがやはりチキンなので、いつも戦闘の時は基本内心冷や汗をかいている。

ＳＡＯ内では一応『攻略組』の枠組みに入るが、本人はそれほど熱心ではない。レベルが８２とこのゲーム内でトッププクラスの高さを誇るが、本人はそれを隠し続け、クエストやら趣味の釣りなどに時間を割いている。

しかしたまには、みんなの役にたちたいなぁと意味のわからない衝動に駆られ、最前線に姿を現す。その時にＳＡＯ本来の主人公、キリトやアスナなどとも顔を合わせているが、ボス攻略後すぐさま立ち去ってしまうため会話をしたことはない。

ナギサと会うまではソロプレイヤーとして生きていくつもりだったが、幼馴染であるナギサが心配でしょうがなく、パーティーを組むようになった。ちなみに他にパーティーを組むのは最前線に行った時くらいである。

デスゲーム宣言がなされた時、本人はかなり混乱していた。家に帰れなくなるだとか姉や兄の家族に心配をかける、だとか様々なことを考えてしまい、一度は錯乱状態に陥りかけた。

しかしそこでナギサと出逢い、顔見知りがいるという安心感に満たされ通常の精神に戻る。

それ以降はナギサと行動を共にし、ＳＡＯを生きている。

？

名前：白鳥渚（しらとりなぎさ）

ＰＣ名：ナギサ

レベル：６８

スキル：槍剣スキル、武器防御スキルは完全習得。料理もそつなくこなすが、あまりしない。とにかく安全を重視したスキル配置のため、索敵や隠蔽スキルなどもかなりの熟練度に達している。

人物紹介：茶髪にショートヘアー。前髪は目にかかる程度で後ろ髪は肩にややかかる程度のもの。基本活発で動き回りたいがための髪型である。

現実世界ではハヤトと同じく高校二年生。兄が買ったＳＡＯを興味本位でログインしたところこのデスゲームに巻き込まれた。部活動は弓道部に所属。その凛とした立ち振る舞いと、活発である性格も相まって高校ではとても人気が高かった。ハヤトとは幼馴染。中学２年のころからハヤトの事を段々と意識し始めるが、本人もずっと兄弟のように見てきたため少々戸惑っている。

弓道部で培った高い集中力と精神力を生かしＳＡＯ内を生き抜く。武器に弓がないと知った時は愕然としたが、仕方なく槍を選んだ。剣でも良かったのだが、ありきたりすぎてつまらない、という理由

から槍を選択。以降、ＳＡＯ内では珍しい『槍使い』としての評判が広まり、容姿の良さも相まってアスナとＳＡＯ内では二枚看板として知られている。

身長１６２ｃｍ。女性としては結構高い方で、本人もこの身長に納得している。

性格は前述したとおり活発そのもの。面倒事に自ら顔を突っ込んでいき、いつもハヤトを振り回している。

戦闘ではその高い集中力でハヤトの手助けをし、補助面にまわる。実際に戦闘しても十分強いのだが、本人曰く「それはハヤトに任せておけば万事ＯＫ」とのこと。このことからもハヤトの気苦労が伺いしれる。

ＳＡＯ内ではかなりの高レベルプレイヤー。本人が望んでこうなったわけではないが、ハヤトと共にダンジョンに繰り出しているうちにここまでレベルが上がって行った。

決してハヤトに頼り切りというわけではなく、戦闘をしないと経験値も入らないことから、ハヤトが疲れた時は交代してモンスターを狩っている。

最前線にはハヤトと共に神出鬼没であり、いつも攻略組をひっかきまわしている。アスナとは何度か離したことはあるがそこまで親しくはない。あまりにも気まぐれで現れることから『神出鬼没の二人組』という愛称までついた。

しかしレベルが高く実力もあるので、最前線に姿を現したときはいつも歓迎されている。

一方、どうしてそこまで実力があるのにもかかわらず積極的に攻略をしないのかという声も出ているが本人曰く「楽しんでいきたいから」とのこと。かなりの楽観主義者である。

デスゲーム宣言当初は本当に錯乱状態に陥っていたが、不意にハヤトと合流。ハヤトと同じように顔見知りがいることで救われ、以後ハヤトと行動を共にするようになる。

人物紹介（後書き）

どうだったでしょうか。
自分でも驚くほどに長くなってしまったのですが……。
読みにくいよ、ここおかしくない？などのご指摘がありましたら感想かメッセージでお送りください。随時受け付けております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2567w/

ソードアート・オンライン～神出鬼没の二人組～

2011年10月9日14時42分発行